

1. はじめに、私はテーマを「舞姫は誰が何のために書いたのか」にした。

なぜなら、この本を読むうちに「舞姫」は実話を基にして作られたものだと思ったからだ。私は、まず豊太郎は森鷗外をモデルとして作られているとし、豊太郎の設定上の立場や心情から鷗外の立場や心情を考える。また、時代背景からも豊太郎や鷗外の心情を考えていこうと思う。そして、その心情からなぜ「舞姫」が生み出されたか考えていく。

結論としては、鷗外がそれまでの自分の生き方に区切りをつけて、自身の道を歩みだすために書いたと考える。

2、まず、豊太郎は森鷗外をモデルとしていると考える

「舞姫」の中の豊太郎の設定では勉強は常に首席で東京大学法学部を卒業。幼少のころより厳しい教育を受け、一人子として母の期待を一身に背負っていた。明治21年に立身出世、家名再興のためドイツに留学し、文学、歴史に興味を持ち勉強し始める。エリスと出会い恋に落ちるまではエリート街道を順調に歩んできていた。最終的にはエリスを捨て帰国した。

一方鷗外は、藩の典医を代々勤める家に生まれ、武家の長男としての自覚を厳しく教え込まれた。幼少のころから神童の誉れが高く、東京大学医学部に人より2年早く入学した。陸軍留学生として一家の期待を一身に背負いドイツに留学。西洋の哲学や文学から大きな影響を受けた。また留学中にエリーゼという恋人ができるが、結局エリーゼを振り切り帰国した。

以上より豊太郎と鷗外の経歴がとても良く似ているため、豊太郎は森鷗外をモデルとしていると考える。

次に、「舞姫」の内容を基に豊太郎と森鷗外の心情を考える。

教科書P264L2～L10「身をはかなみて・・・その概略を文につづいてみる。」とあるように、豊太郎はエリスを捨てて帰国してきたことにひどく罪悪感をもっている。そして、消化しきれない自分の苦しい思いをどうやって解消したらよいか悩み、どうしようもないまま文につづっている。豊太郎は、自分の嘆きを文にすることで苦しい思いを軽減しようとしていると取れる。

鷗外においては、帰国後エリーゼが鷗外を追って日本に来るが、鷗外の一族が彼女を帰国させる。そのすぐ後に「舞姫」を書いている。エリーゼを捨てて帰国しただけでなく、遠く日本まで追ってきた彼女を受け入れられなかったことでさらに罪悪感をもったのではないか。

P267L10～P268L3「ただ行動的・・・攻むるに似たり。」とあるように豊太郎は、自分は受動的でただ人に言われるままに生きてきたことに気づいた。本当の自分は別にあると考え、本当の自分を求めた。しかし結局豊太郎は相沢さんに従った。愛情より恩情と自分の地位を取った。個人の興味や感情より家への責任が重く、さらにいえば個人的なことより国のために役立つほうが誇り高く優先されるべきという思想が当時は強かったからだと考えられる。

鷗外もあるいは自分の意思というより家の仕事として医師の道に進んだのかもしれない。エリーゼを帰国させてしまうくらいだから一族の重みも相当であったのだろう。

P269L9～P270L8「余が幼きころより・・・ふびんなる心を。」とあるように、豊太郎は自分の心を弱いと知っている。この後もことあるごとに自分は弱いのだ、弱いからこんな行動をとってしまうのだと嘆いている。自分がしてしまった行いを弱い心のせいだと言いつつしているように取れる。

鷗外もエリーゼへの罪の意識を言いつつすることで正当化し、後悔しているのだとつづることで心の苦しさを軽減しようとしたのではないかと考える。また書くことで自分自身を見つめなおし本当にやりたいことをやطيعける自分になろうと決意していったのではないか。「舞姫」を書いた後から作家活動を強めていることから、今までの生き方に区切りをつけて自分の道を歩むために書いたと考えられる。

参考資料 便覧教科書